

# 社会科（地理的分野）学習指導案

## 1 単元名

「第3章 日本の諸地域 4節 中部地方―活発な産業を支える人々の暮らし」

## 2 単元について

### (1) 単元観

本単元の「日本の諸地域」は、大項目の第2編「日本のさまざまな地域」の中に位置付けられている。この大項目は、「世界と日本の地域構成」及び「世界のさまざまな地域」の学習成果を踏まえ、日本及び日本の諸地域の地域的特色を捉える学習を通して、我が国の国土に関する地理的認識を深めることをねらいとしている。

そこで本単元「日本の諸地域」では、①自然環境、②人口や都市・村落、③産業、④交通や通信、⑤その他の事象の5つの考察の仕方を基とし、空間的相互依存作用や地域などに着目した主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、地域的特色や課題に関する知識を身に付けさせたい。加えて、中核となる事象の成立条件を、地域の広がりや地域内の結びつき、人々の対応などに着目して考察し、各地域の特色は様々な事象が結び付き、影響を及ぼし合っていることに気づかせたい。

本小単元である「中部地方」は、地域によって自然環境の違いが大きく、様々な産業や文化がみられる。太平洋に面する「東海」、日本海に面する「北陸」、内陸に位置する「中央高地」に分けると、それぞれの地域の特徴が見えてくるが、注目すべきはそれぞれの地域で盛んな産業は日本有数の生産額を誇っている点である。

中部地方の各地域でさかんな産業とその成立条件を地理的要因や歴史的要因からとらえ、多面的・多角的な思考を深めるための手立てとして、東海地方では自動車産業（トヨタ自動車）と畑作（キャベツ、温室メロン、電照菊）、中央高地では高原野菜や果樹栽培と精密機械工業（諏訪湖付近）、北陸地域では稲作（コシヒカリ 越後平野）と地場産業（小千谷ちぢみ 新潟県小千谷市）を扱う。

愛知県を中心に広がる中京工業地帯は、工業出荷額の規模が日本一の大きな工業地帯であり、他地方からも職を求めて多くの人々がやってくる日本最大の工業地帯ともいえる。その愛知県では江戸時代から綿花栽培が行われ、農家が副業として織る綿織物工業がさかんであった。明治時代になると綿織物工業は近代的な織機を使って行われるようになり、豊田佐吉が新しい織機を発明したことは有名である。【歴史的背景】その後、佐吉の息子の喜一郎は自動車製造の研究を始め安くて広い土地があり、交通の便が良く、周辺の農村から安い労働力を得られる現在の豊田市が今のトヨタ自動車の起源となった。【地理的要因】自動車1台を造るには約3万

点もの部品を組み立てる必要があり、トヨタ自動車の場合は豊田市と周辺に集まっている1000以上もの工場や、世界中の協力会社で作業が行われている。その製造過程で有名なのが、組み立て工場に必要な量を必要な時に部品工場から納入してもらう「ジャスト・イン・タイム」や、どの部品がどれだけ使われているのかを箱に示す「かんばん方式」などの独自の仕組みである。このような企業としての工夫が時間や在庫のむだを省いた効率的な生産を可能にしていることは言うまでもない。【人々（企業）の工夫】また、トラックで輸送される場合は高速道路、船の場合は名古屋港や三河港が利用されるなど、輸送の便が良いことも豊田市の立地上のメリットである。【地理的要因】

大きな川がなく、晴れの日が続くと水不足に悩まされていた渥美半島は農業に苦勞した地域である。かつての渥美半島では養蚕が盛んで、蚕の餌となる桑畑が広がっていた。しかし、化学繊維の普及などによって養蚕が衰退したため、桑畑も少なくなった。第二次世界大戦後は、養蚕から利益が大きいキャベツ栽培に転換する農家が多くなり、1968年に豊川用水が完成したことで渥美半島は一大農業地域へと生まれ変わる事となった。【歴史的背景】渥美半島で栽培されるキャベツのほとんどは、夏から秋に種をまき、11月頃から3月に収穫する冬キャベツである。冬キャベツは寒さに弱く雪が降ると傷むため、黒潮の影響を受け、年間を通じて温暖であり霜が降ることもほとんどない渥美半島に適した農産物である。また、キャベツの他にガラス温室やビニールハウスを利用した施設園芸農業も盛んである。他の産地と出荷時期をずらすことで、農産物を高い価格で販売することができるメリットがある反面、施設を温める燃料などの費用がかかることがデメリットであるが、渥美半島は黒潮の影響で冬も比較的暖かく日照時間が長いことから、暖房効率がよく燃料費をおさえることができる強みがある。【地理的要因・気候的要因】

長野県の東部に位置する川上村は、千曲川（信濃川）の源流に位置し、村全体が標高1000mを超え、冬場は気温が-20℃にもなる高冷地である。この気候を生かして夏の暑さに弱いレタスの栽培が盛んであり生産量は日本一である。もともと川上村では、第二次世界大戦前にはそば、あわ、ひえのような雑穀やレタス、はくさいなどの野菜がわずかに栽培される程度であった。川上村が日本有数のレタス生産地として生まれ変わったきっかけの1つは、1950年に始まった朝鮮戦争である。当時、日本は朝鮮半島や日本に駐在するアメリカ軍に対し食料などを提供していた。洋食に欠かせないレタスは、鮮度が落ちやすくアメリカ合衆国から運ぶことができないため、冷涼でレタス栽培に適していた川上村で栽培が始まったのである。【歴史的背景】高度経済成長期の食の洋風化に伴い、川上村ではレタスの需要に対応するために高原を開拓して土地を改良し、生産量を増加させた。また、種を直接畑にまく「直まき」と呼ばれる方法から、苗を畑に植える方法へ変更したことでレタスが冷害にも強くなり、安定した生産が可能になった。【地理的要因・人々の工夫】その後、財政が豊かになった川上村では農業振興のためにケーブルテレビを導入し、村の天候や農産物の出荷情報などを配信することで農家が必要とする情報をすぐに得ることができるよう工夫をしている。

工業が盛んな地域は臨海部に多いが、内陸に位置しながら中部地方で3番目の工業生産額を誇るのが長野県（諏訪地方）である。諏訪地方は冷涼で土地がやせているため、明治時代の初めまで米が多くとれず、貧しい農家が多かった。明治時代中期になると、諏訪地方では周辺の農

家で生産された蚕の繭や水車、発電所などの動力が利用できたこと、繭を煮るのに使う豊富な水があったこと、政府による殖産興業などを受けて、生糸を造る製糸業が急速に発達した。生産に関わった女工と呼ばれる女性たちは、周辺の村だけではなく全国から集められ働く人たちのために宿舎や学校、温泉、劇場などをつくる企業もあり、これらの施設は大いに賑わった。しかし、世界恐慌や第二次世界大戦による生糸の輸出価格の下落、化学繊維の普及におされ次第に製糸業は衰退していった。かわって製糸用機械の修理から始まった中小の企業や空襲を避けて東京大都市圏から移転してきた工場が製糸工場の跡地や建物などを利用して生産を始めたことにより、機械工業が盛んとなるきっかけとなったのである。第二次世界大戦後、戦時中にほかの地域から移転してきた工場が諏訪地方に残ったこと、工場で働いていた人や農家が起業したことで機械工業が盛んになった。【歴史的背景】また、中央自動車道や長野自動車道の開通後は、広い敷地や製品の輸送の便を生かして、電気機械の工場が諏訪湖周辺の地域から伊那盆地、松本盆地などのインターチェンジの周辺に多く立地するようになった。【地理的要因】その代表例として、セイコーエプソンが挙げられる。第二次世界大戦中に地元で時計の生産や修理を手掛ける会社として設立され、戦後東京から移転してきた企業の工場を譲り受けてできたすわ精工舎は、東京オリンピック（1964年）でも使われた水晶時計による計測装置や世界で初めてのクォーツ式腕時計の発売などを手掛けた。その後、時計の部品を造る技術を応用してIC（集積回路）などの電子部品の生産も始めた。1985年には子会社として合併してセイコーエプソンとなり、精密時計だけではなくプリンタや映像機器、ソフトウェアなど幅広い電気機器類を生産している。

コシヒカリは日本で最も多く栽培されている品種ではあるが、1950年代に開発された当時、味は良いが他の品種と比べて丈が高いやめ倒れやすく、病気に弱いという欠点があった。しかし、肥料の与え方など栽培方法を工夫した結果、多くの農家が栽培できるようになった。また、北陸地方は夏に比較的気温が高くなること、冬の間山間部に積もった雪が春には雪解け水となって水田に流れることなど稲作に適した自然環境に恵まれている。【地理的要因・気候的要因】

特に越後平野は日本有数の稲作地帯である。しかし、以前の越後平野を流れる川は、日本海の海岸にそって延びる砂丘が河川の出口を塞いでいて、海へと流れることができずたびたび洪水を起こしていた。平野にたまった水は簡単には抜けず、河口付近に大きな水たまりのような潟湖が形成され、水はけの悪い湿地帯が周囲に広がっていたのである。そのため、この地域の米は質が悪く、鳥さえも食べない「鳥またぎ米」と呼ばれるほどであった。こうした状況を改善するために、江戸時代の中頃から、越後平野の各地でトンネルを掘って水を海に流したり、潟湖に水がたまらないように排水して干拓したりする工事が始められた。大正時代には、信濃川の水を越後平野の途中から日本海へ流す大河津分水路が造られ、洪水に見舞われることが少なくなった。その後、小さい水田を大きな区画に敷地することで機械による田植えや収穫作業などが容易になったり、病気に強く、たくさん米を収穫できる品種が開発されたりしたことで、米の生産量が増加した。【歴史的背景（人々の工夫）】

また、長い冬の間、農作業をすることが難しいことから、北陸地域の農家ではほかの地域と比べて昔から地域の特色を生かした副業がさかんであった。【地理的・気候的要因】新潟県小千

谷市では、「小千谷ちぢみ」と呼ばれる 1000 年以上の古い歴史をもつ麻織物が生産されている。「小千谷ちぢみ」は江戸時代になって、夏の衣料として改良され、布に「しぼ」と呼ばれる波うった小さなしわをつける技術が加えられた。【歴史的背景】織物を雪の上に置いてさらすことで生地が漂白され、織物に染めた模様がきれいに仕上がる。この作業は 2 月下旬ごろに行われ、春の始まりを告げる風物詩にもなっている。現在は着物を着る人が少なくなったため、小千谷ちぢみを取り巻く環境は厳しい。しかし、最近はデザインを現代風にアレンジして、若者にも合うように工夫したり、シャツやネクタイ、スカートなどにも利用されたりしている。【歴史的背景（人々の工夫）】

以上のように、中部地方のそれぞれの地域で産業がさかんな理由を地理的要因や歴史的背景、人々の工夫などの視点からとらえる活動を通して、生徒の社会的事象への多面的・多角的な思考力の育成をめざしたい。

## (2) ICT（ギガタブ）活用について

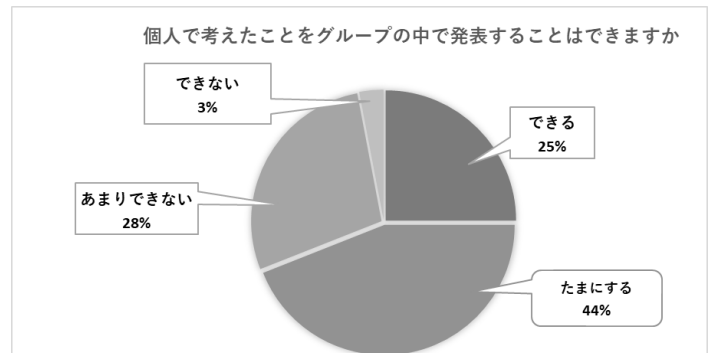
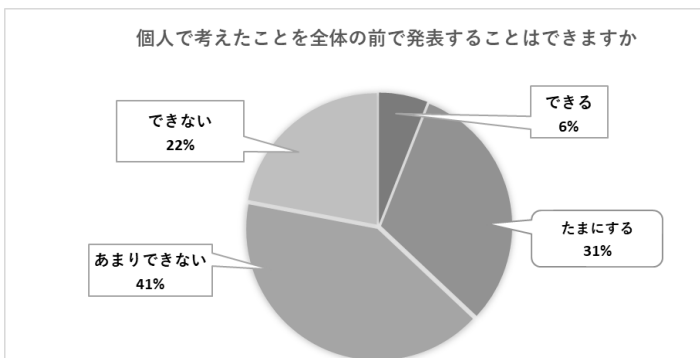
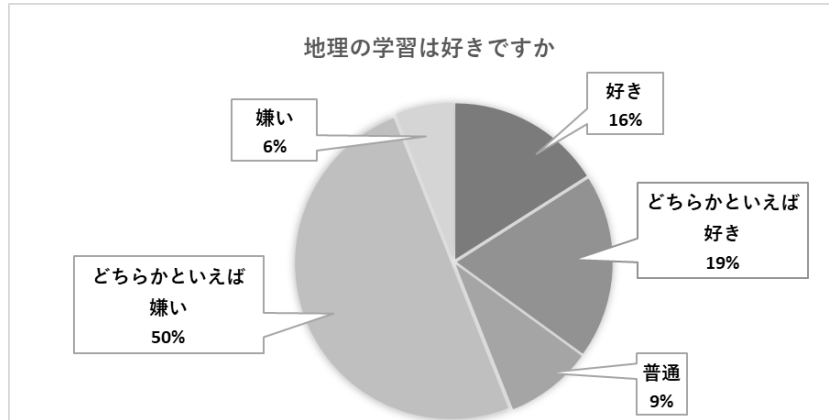
本小単元の指導にあたっては、生徒が中部地方の地理的事象を様々な側面から考察し、地域的特色をまとめるための思考ツールとして Jamboard を活用し、個人活動と他者との交流活動を位置付けた学習を行う。

まず、地理的事象の意味や特色などを考察し、小単元を貫く問いを設定する。次に、中部地方の自然・気候・産業などの地理的事象を地図や資料の読み取りから表出させ、既習内容や生活経験との比較から事象の分類・集約をしていく。ここでは Jamboard の付箋機能を利用して、東海・北陸・中央高地それぞれの地域について、自分の考察をまとめる作業を設ける。そして、小集団の交流活動による付箋の操作を通して中部地方の特色をまとめ、最終的に中部地方の一つの地域について、複数の背景や要因を根拠にして、論理的に説明できるようにする。ここでは、パフォーマンス課題「中部地方の得意とする産業にまつわるキャッチフレーズを設定し、中部地方の産業を全国にアピールしよう」を提示し、それまでに作成してきた Jamboard の付箋シートを基に各班で取り組む。最後に全体で中部地方の地域的特色をまとめ、文章で表現できるようにする。

## (3) 生徒の実態（2 年 2 組 男子 17 名 女子 18 名）※アンケート実施時は在籍 33 名

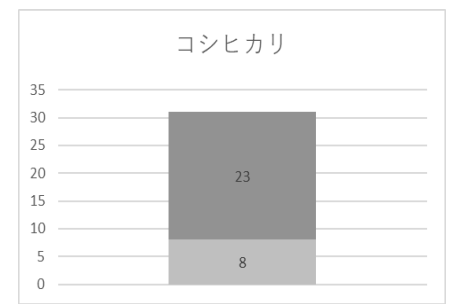
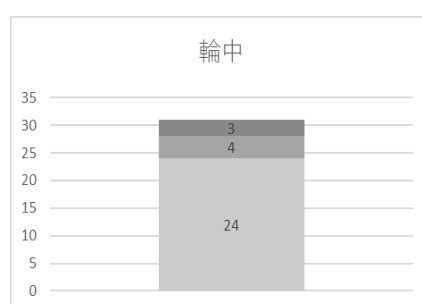
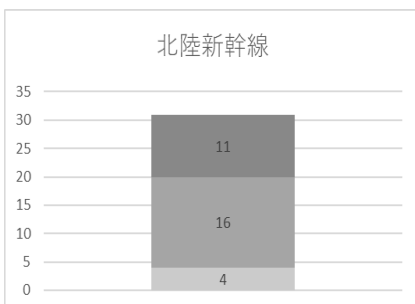
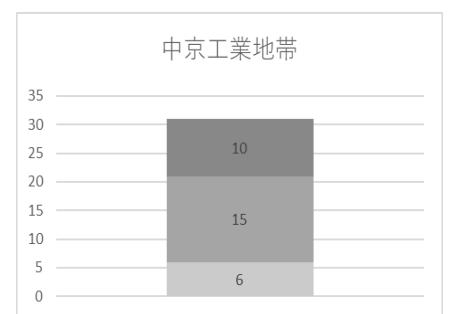
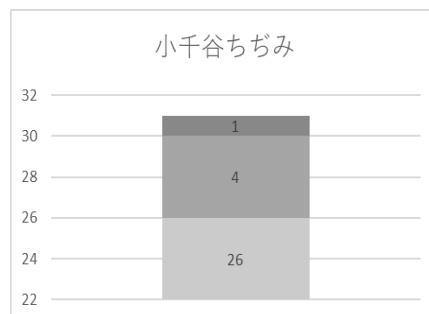
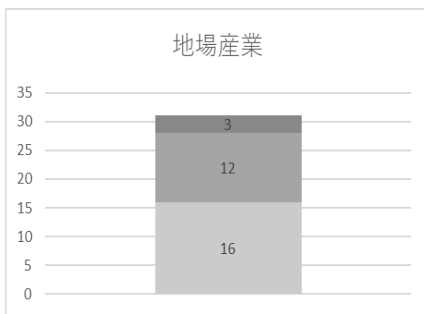
本学年は、1 学年から班を単位とした学年・学級活動を行っている。そのため、本学級の生徒も班内での活動では男女問わず活発な意見を交換する様子が見られる。しかし、交流の中で生まれた意見や考えをまとめ、口頭や文章で発表することや得た情報を考察していくことに慣れていないため、他者に論理的に表現する能力が乏しい。また、活動内容によっては教師による個別支援、あるいは級友との協同学習といった支援を必要とする生徒もいる。

以下は、本小単元開始前に行ったアンケートの結果である。



中部地方に関する次の語句について、どれくらい知っているか当てはまる番号を教えてください。

3 = どのようなことかわかる (グラフ下段)      2 = 名前は知っている (聞いたことはある) (中央)      1 = 名前も知らない (上段)



稲作（米づくり）に必要な条件には、どのようなことがあると思いますか。

- ・適切な気温
- ・水
- ・場所
- ・機械
- ・苗
- ・場所（土地）
- ・人手
- ・泥
- ・空気
- ・適した地形
- ・お金
- ・働く人の体力（愛情）
- ・日光
- ・肥料

中部地方について、知っていることがあれば書いてください。

- ・山が多い
- ・降水量が少ない
- ・米づくり、野菜栽培がさかん
- ・林業がさかん
- ・めがね
- ・雪が多く降る
- ・方言がある
- ・日本アルプス
- ・日本の中央に位置する

アンケートの結果によると、全体の前で発表することを苦手とする生徒はいるものの、グループ活動の中で発表する機会と合わせて考察すると、7割ほどの生徒が発表の場面や状況によって自分の考えを他者に伝えられることが分かる。

中部地方に関してどれくらい把握しているかを調査した質問では、解答が多かった内容は既習内容を中心とした情報である。「わからない」もしくは無回答の生徒が学級の半数以上を占めることから、中部地方で発達した産業とその背景、人々の生活について知らない生徒が多いことが分かった。

以上のような生徒の実態から、本学級の生徒の課題は生徒が既習内容や基礎知識を基に、自然環境・気候・産業・交通（通信）などに関連づけながら、地域的特色を捉えて根拠を明確にして表現できるようにすることである。

### 3 単元の目標

- (1) 各地方の特色ある地理的事象や事柄を、有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現することができる。
- (2) 日本や国内地域に関する各種の資料を基に、地理的な見方・考え方や、地図や景観写真の読み取り方などの地理的スキルを身に付けることができる。
- (3) 日本の地域構成と地域的特色について、設定した課題を主体的に追究しようとしている。

## 4 単元（小単元）の指導計画

### (1) 本小単元の指導計画（全6時間計画）

時	主な学習活動（内容）	評 価
1	○中部地方の自然環境 ・東海・北陸・中央高地の特徴的地形と気候 ・各地域の農業、工業生産額 ●小単元を貫く問いの設定 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">             中部地方では、なぜ地域によって生産されるものに違いがあるのだろうか           </div>	◇中部地方の地形や気候の特色を理解している（知技）
2	○東海の産業と地域的特色 ・さかんな畑作（キャベツ）、施設園芸農業（温室メロン、電照菊） ・国内最大の輸送機械工業（自動車関連）	◇東海の産業の成立条件を、自然環境や人々の対応、地域内や他地域との結び付きに着目して、多面的・多角的に考察している。 （思判表）
3	○中央高地の産業と地域的特色 ・盛んな高原野菜（レタス、白菜）や果樹栽培（桃、梨、ブドウ） ・諏訪盆地における精密機械工業の発展	◇中央高地の産業の成立条件を、自然環境や人々の対応、地域内や他地域との結び付きに着目して、多面的・多角的に考察している。 （思判表）
4	○北陸の産業と地域的特色 ・雪深い自然条件と人々の工夫 ・盛んな稲作（コシヒカリ）と地場産業、伝統産業（小千谷ちぢみ）	◇北陸の産業の成立条件を、自然環境や人々の対応、地域内や他地域との結び付きに着目して、多面的・多角的に考察している。 （思判表）
5 本 時	○パフォーマンス課題の提示 「中部地方の得意とする産業にまつわるキャッチフレーズを設定し、中部地方の産業を全国にアピールしよう」 ●グループ内で担当する地域のキャッチフレーズの考案	◇地域ごとの産業を、その成立条件や地域内、他地域との結び付きなどを多面的・多角的に考察し、その結果をキャッチフレーズの形で表現している。 （思判表） ◇産業をテーマとしたキャッチフレーズについて主体的に追究しようとしている。 （態度）
6	○まとめ（中部地方の結びつき）	

## 5 本時

### (1) 本時の目標

中部地方の各地方について産業を中核としたキャッチフレーズを考え、設定した理由を他者に表現する。

### (2) 本時の「主体的及び対話的な学び」

- ① これまでに作成した Jamboard を基に、班単位で担当する地方のキャッチフレーズを考案する。
- ② キャッチフレーズと設定理由を他の班の前で発表する。

(3) 本時の展開

時配	学習内容と活動	留意点 (○) 及び評価 (◇)
導入 5分	①前時までに各班で作成した Jamboard を、班長が隣の班 (1 - 2 班、3 - 4 班、5 - 6 班) に説明する。  ②パフォーマンス課題の説明を聞き、本時の活動を理解する。	○副班長が Jamboard をギガタブで開き、他の班員は班長の補助 (補足説明) をするように指示を出す。  ○担当する地方を班ごとに振り分ける。
展開① 30分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             中部地方の得意とする産業にまつわるキャッチフレーズを設定し、              中部地方の産業を全国にアピールしよう。           </div> ③例示されたキャッチフレーズの紹介文を聞き、自分たちの活動を理解する。  ④班ごとに担当する地方のキャッチフレーズを考え、紹介文を作成する。 <例> 「雪の結晶～北陸の産業～」 「自然を活用！たくましい産業～中央高地～」	○九州地方 (鹿児島県) で作成したキャッチフレーズを例示する。 <サツマイモで育った「歩く野菜」>  ○前時までに作成した Jamboard を基に、考えるよう指示を出す。 ◇各地方でさかんな産業について、地域的特色と関連付けて考察し、キャッチフレーズを考察している。(思考力・判断力・表現力)
展開② 10分	⑤ホワイトボードを掲示し、キャッチフレーズと設定した理由を全体の前で発表する。 ・他の班の発表時には、ワークシートを記入する。	○ホワイトボードにキャッチフレーズを記入させる。 ○発表者を班で決定するように指示を出す。 ○審査基準と照らし合わせて、他の班のキャッチフレーズについてワークシートに記入するよう伝える。(主体的に学習に取り組む態度)
まとめ 5分	⑥ワークシートをまとめる  ⑦次時の予告を聞く	○記入が終わっていない生徒の支援をする。  ○次時で中部地方の各地方の結びつきを考察することを伝える。



<パフォーマンス課題> 本小単元 第5時で提示

このたび、「中部地方：産業アピール祭」が開催されます。

今回の祭りの目的は、

中部地方の得意とする産業にまつわるキャッチフレーズを設定し、中部地方の産業を全国にアピールしよう！

というものです。

キャッチフレーズとは、宣伝・広告などで、人の心を捉えるように工夫された印象の強い言葉のことです。

みなさんは各班に分かれて、中部地方各地で実施される「北陸大会」「中央高地大会」「東海大会」のいずれかに参加することになります。担当する地域の産業を表すキャッチフレーズを一言で考え、そこに込められた意味と想いを説明してもらいます。

シンプルなキャッチフレーズと詳しい説明で中部地方の魅力を全国に伝えていきましょう。

審査基準

評価	内容について
A	・キャッチフレーズが地域の産業と関連したものになっている。 ・それぞれの地域の産業について自然環境や歴史背景、人々の工夫など複数の視点から説明している。
B	・キャッチフレーズが地域の産業と関連したものになっている。 ・それぞれの地域の自然環境と関連した説明になっている。
C	・キャッチフレーズが地域の産業や地域的特色と関連していない。 ・キャッチフレーズの説明がわかりにくく、具体性が乏しい。

組 班(班員)

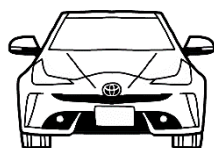
【 北陸 ・ 中央高地 ・ 東海 】のキャッチフレーズ

(キャッチフレーズに込められた想い・理由)

審査基準

評価	内容について
A	・キャッチフレーズが地域の産業と関連したものになっている。 ・それぞれの地域の産業について自然環境や歴史背景、人々の工夫など複数の視点から説明している。
B	・キャッチフレーズが地域の産業と関連したものになっている。 ・それぞれの地域の自然環境と関連した説明になっている。
C	・キャッチフレーズが地域の産業や地域的特色と関連していない。 ・キャッチフレーズの説明がわかりにくく、具体性が乏しい。

## 中部地方産業アピール祭～審査用紙～



地域	キャッチフレーズ	評価
東海		
東海		
中央高地		
中央高地		
北陸		
北陸		

評価	内容について
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチフレーズが地域の産業と関連したものになっている。</li> <li>・それぞれの地域の産業について自然環境や歴史背景、人々の工夫など複数の視点から説明している。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチフレーズが地域の産業と関連したものになっている。</li> <li>・それぞれの地域の自然環境と関連した説明になっている。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチフレーズが地域の産業や地域的特色と関連していない。</li> <li>・キャッチフレーズの説明がわかりにくく、具体性が乏しい。</li> </ul>

【 北陸 ・ 中央高地 ・ 東海 】のキャッチフレーズ

雪の結晶～北陸の産業～

(キャッチフレーズに込められた想い・理由)

北陸地方は全国有数の生産量のコメと伝統産業を誇りとしています。実はこれには「雪」と大変深い関係があるのです。稲作に必要な大量の水は雪解け水から得ることができます。また、冬になると雪で覆われるこの北陸地方では、冬の間農作業が困難であり、家の中で作業のできる工芸品を伝統的に作成してきたために、今や地場産業となりました。特に小千谷ちぢみは雪にさらすことで染め模様をきれいに仕上げることができるのです。このように、北陸の誇りある産業は雪に負けずに努力を重ねてきた、まさしく「雪の結晶」と言えるものでしょう。

【 北陸 ・ 中央高地 ・ 東海 】のキャッチフレーズ

自然を活用！たくましい産業～中央高地～

(キャッチフレーズに込められた想い・理由)

中央高地では、野辺山原をはじめとする、夏でも涼しい気候を利用してレタスなどの高原野菜を栽培したり、水はけのよい扇状地を利用して現在ではブドウなどの果樹栽培を行ったりするなどの自然環境をうまく生かした産業が盛んです。ただし、これらは水田に向かないという理由から始められたという経緯もあり、地域の厳しい自然環境に屈しない地元の人たちの努力と工夫の姿、つまり「自然を活用」した「たくましい産業」と言えると思います。

### 【引用文献】

中野英水（2021年）．『パフォーマンス課題を位置づけた中学校地理の授業プラン&ワークシート』．明治図書 p 117

中野英水（2021年）．『パフォーマンス課題を位置づけた中学校地理の授業プラン&ワークシート』．明治図書 p 116

### 【参考文献】

藤原光政（2018年）．『中学社会 地理的分野の授業デザイン&実践モデル』．明治図書

岩田一彦（1991年）．『小学校社会科の授業設計』東京書籍

澤井陽介・加藤寿明（2017年）．『見方・考え方[社会科編]』．東洋館出版社

澤井陽介・中田正弘（2014年）．『ステップ解説 社会科授業の作り方』．東洋館出版社

千葉均（2020年）．『中国・四国地方』．ポプラ社．日本の地理

武者忠彦,植村円香,佐藤正志,中村努（2013年）．『中部地方』．帝国書院．地理シリーズ日本のすがた

北俊夫（2011年）．『社会科学力をつくる“知識の構造図”』明治図書

北俊夫（2012年）．『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』文溪堂